

## 絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践 ～やぎさんからのお届け物～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年  
平田華那・田中千咲都・平田蘭・  
田中陸翔・松永王治・川口紋奈・  
陶山夜空・岡島あゆな・尾畑妃奈乃・  
江崎紗知・宮原衣菜・加藤李茜

### 1. 実践の概要

題材とした絵本：『まどから☆おくりもの』  
文：五味太郎 絵：五味太郎  
出版：偕成社

実践のタイトル：「やぎさんからのお届け物」

実践準備の担当：総合責任者（平田華那）、脚  
本（平田蘭）、大道具（江崎紗  
知）、衣装（宮原衣菜）、音楽  
（平田華那）、会計（加藤李  
茜）

実践時の担当：ヤギ（平田蘭・田中千咲都・平  
田華那）、ウサギ（岡島あゆ  
な・江崎紗知・尾畑妃奈乃）、  
クマ（加藤李茜）、ブタ（川口紋奈）、ライオン（宮原衣菜）ワニ（陶山  
夜空）、おにいさん（田中陸翔・松永王治）、音・演奏（平田華那）



### 2. 題材について

絵本の特徴として1つ目にあげられるものは、サンタさんがいろんな動物にプレゼントを届けに行くのだが窓から見えた動物の特徴だけでプレゼントを置いてしまうのでみんなのプレゼントを間違えながら配っていくというお話だ。

間違える例として窓からネコの顔が見えているからサンタさんはリボンをプレゼントとして置いたのだが実際にその家に住んでいたのはブタだった、のように次のお家でも本当に渡すはずだったプレゼントとは違うものを渡しながらみんなのお家を回る。

特徴の2つ目が絵本のページには窓から覗けるように穴が空いていて、その穴を覗いてみると家の中が見れる仕様になっているというものだ。窓から覗いて例えば、ネコが見えていたからネコが住んでるのだろうと思ってページをめくってみると、ネコではない動物が住んでいたりして、ページをめくる度に今度はなんの動物がこのお家には住んでいるのかな？とワクワクしつつ、サンタさんに対して応援するような気持ちで絵本を読むことができる。

選択した理由として、サンタさんから子どもたちからとでは見えている動物が異なるようにして、子どもたちにだけ本当に住んでいる動物が見えるようにした。

そしてサンタさんがちゃんとその動物にあったプレゼントを渡せるように子どもたちに協力してもらいこっそり教えてもらって、お手伝いをしてもらうことで一緒に参加しつつおっ

ちょこちょいなサンタさんが間違えないようにプレゼントを渡すところを見て楽しんでもらえるかなと思った。

実際には宗教上の理由でサンタさんを主人公にすることができないとなったので、サンタさんをヤギにした。主人公がヤギなのであればプレゼントではなくお手紙の方が良いのではないかなって結果主人公をヤギに変更して、やぎさんゆうびんをしようと話し合いで決まった。

(執筆者：加藤李茜)

### 3.絵本の世界から遊びへの展開

『まどから☆おくりもの』からグループのメンバーで考えた劇には、シルエットクイズが出てきた。九州大谷幼稚園での実際の演習では1枚の半透明な板の後ろに動物の格好をした人が影になるようにした。動物の格好をした人とピアノを弾く人、板を持つ人でわかれて行った。動物が出てきて子どもたちに答えてもらっていった。その時の反省としては、正解して出番が終わった動物は前にいるだけになってしまってなんでまだいるの?となってしまった状況があった。

また、先生からのアドバイスではただの動物の格好をしたお姉ちゃんが出てきただけに見えるといった意見が出てきた。動物の声真似を板の後ろでしていたがもう少しこだわった方がいいという反省が出てきた。しかし、その時に工夫もした。きちんと影になるように板の後ろにライトを準備した。光が弱すぎると見えにくかったため強くしたり動物の人が板のギリギリまで近づいたり動物の影がわかりやすいようにした。本番のこども劇場では、影でシルエットを作ることはやめて大きな家から動物の1部が見えるようにした。

ステージ上いっぱい大きな家を作りその家に2つ窓を作った。ブタは、ネコの服を着ているからネコを窓から出したりクマは、暗くて見えにくい設定だったから隠れたりしていた。他の動物達も1部を見せて他の動物に見えるようにしたり、何の動物か分かりにくい工夫を行った。また、ただ子どもたちに聞くのではなく3匹のヤギが手紙を届けるから子どもたちと一緒に探せるように子どもにも参加してもらおうようにした。インタビュー係を2人決めて子どもに聞きに行くようにした。最初は、プレと同じようなシルエットクイズにしようとしていたが話し合いの中でシルエットは分かりにくくなり動物の一部を子どもに見えるようにすることになった。ただ動物の1部を見せるのではなくジャンプしたり、手を動かしたりしてその動物の特徴を再現していた。ヤギは子ども達に語りかけをしたり、その動物のピアノを弾いてヒントを出していた。



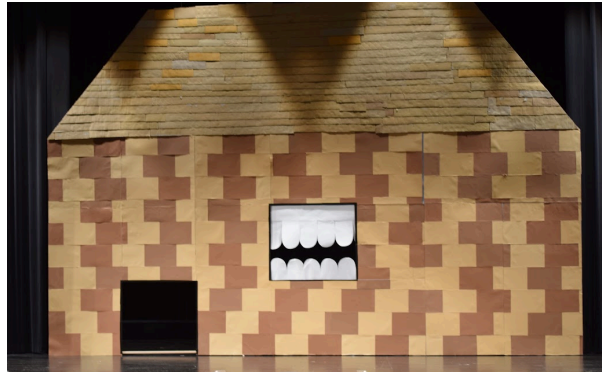
(執筆：田中陸翔)

### 4.実践に際して大切にしたこと

実際に実践して大切にすることは、子どもたちがワクワクするような発見する楽しさや自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを体験することだ。その為に配慮や検討したことは、ブタのお家は、ブタがネコの洋服を着ているためネコのお家に見えるようにした。次の誰も居

ないお家は、実はクマのお家でクマは大きくて茶色いため誰もいないように見せた。また、ウサギのお家ではウサギの耳を並べて、ワニの白い歯に見えるようにし、ワニのお家に見えるようにした。

ライオンのお家では、しっぽが見えていてライオンやキリンなどのしっぽが似ている動物にした。最後のワニのお家では、ワニの背中のギザギザになっている部分が窓から見え、キツネの耳に見えるようにした。このように動物の特徴を活かして他の動物に見えるようにしたり、「そういうことだったんだ」と思えるようにして、子どもたちがワクワクするように考えた。また子どもたちが自分の意見を言えるように、ヤギたちとのやりとりがあったり、マイクを使って子どもたちに聞いてみるようにした。動物とのやりとりでどの動物のお家なのか正解を導きだせるようにした。最後に動物たちが手紙を持って前に出てきて、子どもたちと一緒に答え合わせが出来るようにした。子どもたちがもし間違えても大丈夫なように手紙を多めに用意した。



(執筆者：江崎紗知)

## 5.実践内容について

### (1) 全体の構成

はじめに、おっちょこちょいな新人ヤギにするために1人寝坊して社長ヤギにまた怒られると言うシーンを作った。その後子どもたちとの雰囲気作りをしたかったため『やぎさんゆうびん』を歌い、劇に入った。最初の動物はブタだが、ネコの顔を出してネコと間違える場面である。音楽が流れると本当の動物が出てきて、子どもたちに教えてもらうようにした。子どもたちが応えたブタの手紙を投函した。次の動物はクマだ。クマは茶色く、大きいため留守だと勘違いしてしまうヤギだが、音楽が流れると顔を出してクマが出てくる場面を作った。

子どもたちに何の動物がいたか尋ね、応えてもらったクマの手紙を投函した。

次はウサギだ。ウサギの耳が歯に見える、子どもたちも「オオカミ」と応えオオカミと勘違いするヤギだが、音楽が流れると本当の動物が出



てくる。子どもたちが応えたウサギの手紙を投函した。次はライオン。しっぽが見え、キリンのしっぽと勘違いするヤギだが、音楽が流れると本当の動物が出てくる。すると、子どもたちは「ライオン」と応えたため、ライオンの手紙を投函した。最後はワニである。最初、ヤギたちには、キツネの耳に見える設定だったが、子どもたちが「ワニ」や「キョウリュウ」と応え

たため、どちらか尋ねる。音楽が流れ、本当の動物が出てくると「ワニ」と応える子どもが多かった。そのためワニの手紙を投函した。全てが終わると、手紙がきちんと正しく届いているかの確認を行った。合っているとヤギ同士でタッチを行って楽しい雰囲気を作った。ブタ、クマ、ウサギ、ライオン、ワニと全て合っていた。合っていたため、最初の寝坊してしまった黒ヤギの場面に繋げた声掛けを行った。子どもたちが手紙が残っていることに気づき、次の町の手紙ということ伝えて劇は終了した。



(執筆者：平田蘭)

## (2) 子どもたちとの対話について

子どもたちの想像力や発想力を聞き出せるような声掛けを取り入れた。窓から見えている一部分で子どもたちはどのような動物を想像したり何に見立てているのか知りたかったためそのような対話を取り入れた。子どもたちには何に見えているのか、あれは何なのかを尋ねてみて子どもたちが発する言葉をなるべく多く拾えるように意識した。そして、子どもたちが言った言葉をしっかり繰り返して自分の意見がしっかり通っているということを認識できるように意識した。最初の動物のブタの時には、ネコの顔が見えて、「ネコがいたよ」などと教えてくれる子どもや、「違うよ！ブタだよ」と教えてくれる子どもがいて、ヤギはどっちなんだろうと迷っているような素振りを見せた。そして、「ネコなのかブタなのかどっちだと思う？」と尋ね、子どもたちの教えてくれたネコとブタの両方の動物を示した。次はクマで、クマと言う子どもが多かったが、その中でタヌキという意見を言う子どももいた。そ

の子どもの意見も大切にしたいため「タヌキって言ってる子もいるよ」などというセリフを入れ、クマという意見が多い中、タヌキと言ってくれた子の意見を拾い、子どもとの対話をひろげることができた。次はウサギで、ウサギ達の耳が歯に見えるようにしてみた。すると、「歯!」「オオカミの歯!」という言葉が次々と出てきた。そして「歯に見える??」「他に違うものに見えるよって入る?」などと、教えてくれた意見も取り入れ、別の意見を持っている子どももいるかもしれないと思い尋ねた。そして、ウサギが出てくると「ウサギ!」とみんな教えてくれた。次の動物のライオンでは、しっぽが見えるとライオンという言葉とキリンという言葉が聞こえた。ここでも、「ライオンとキリンどっちだと思う?」と出てきたふたつの動物を示して尋ねてみた。この時は、キリンとライオンで手を挙げた数があまり変わらなかった。少しだけライオンが多く見えた為、ライオンということで手紙を入れた。最後の動物のワニの時には、ワニという意見とキョウリュウという意見があった。ここでも「ワニとキョウリュウどっちだと思う?」と尋ね、ワニの方が多く感じられたためワニの手紙を入れた。しかし、最後までキョウリュウと言いつける子どももいた為、「ワニにも見えるけどキョウリュウにも見えるよね」という共感のセリフを言った。そして、最後に手紙がちゃんと届いているかを確認する際に、「お手紙ひとつ残ってるよ」と教えてくれた子どもがいた。その言葉を無視すると、子どもは意見を聞いてくれなかったと悲しい気持ちになるかもしれないと思い、「ほんとだ手紙残ってるね。」「このお手紙は次の町へ届ける手紙だね」とストーリーに沿って子どもにも理解できるように伝えた。子どもたちとの対話では、練習やリハーサルで想像していた通りに行かないことの方が多いが、実際の子どもの言葉の聞くことで新たな発見や対話に繋がることができると感じた。

(執筆: 田中千咲都)

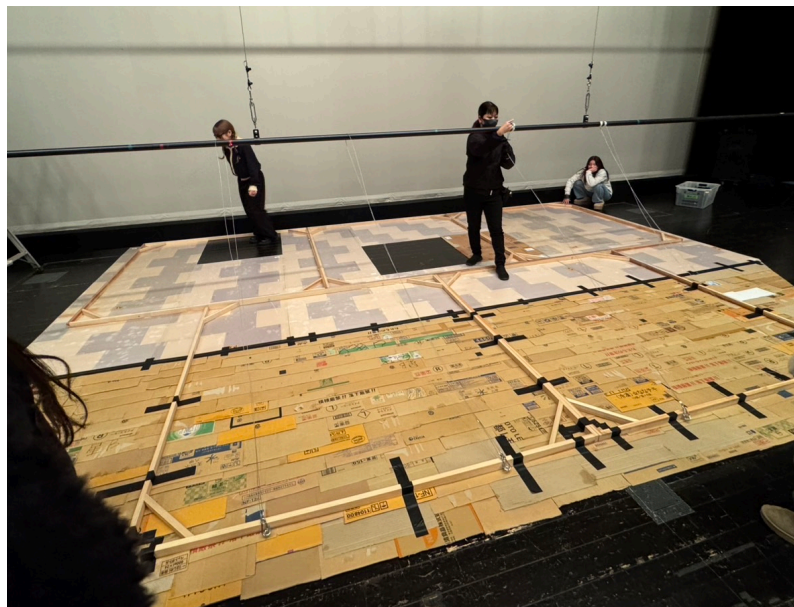
### (3) 演出の工夫

まずは、子どもたちとお話の世界に入りやすく興味を持ってもらいやすくするために、大きな家を作った。このお話は絵本の中ではページをめくると家の中が見え、答えがわかるという構成がされていたが、舞台上では2つの窓から動物の特徴ある箇所、違う動物にも似ている箇所を出して、子どもたちの想像を膨らませられるような構成にした。また、音楽をつけるなどし、音楽を楽しみながら答えを探した。

家の屋根は、ダンボールを切ってあてまばらな模様を作り普段は捨てているダンボールを再利用した。ワニの背中もダンボールを再利用した。

また、ただ動物の耳や、しっぽなどを絵に書いて見せるのではなく、学生が実際に道具を身につけ、跳んだり、手を上下に動かしたりと動きをつけ、より楽しめるようにした。

リハーサル前までは、たんとんと学生が話し、子どもたちに問いかけ、また答えを学生側が発言し、正解不正解を話していくだけになっていた。



リハーサルを通して、私たちのただの劇になっているとアドバイスをもらい、その後練習の中で、ヤギはヤギでも黒ヤギはおっちょこちょい、白ヤギはしっかり者という設定を作り、黒ヤギが遅刻してくる、ミスをするなどの演出を付け加えた。

また、子どもたちが「なんの動物がいるのだろう？」という疑問や想像を膨らませるために、最初からヒントや答えを投げかけるのではなく、子どもが叫んでくれる動物の名前から会話を広げる工夫をした。たんと進んでいく劇ではなく、子どもたちが疑問を持ち、考えを発することで私たちとの会話を広げて楽しめるような発表にした。

(執筆者：岡島あゆな)

#### (4) 言葉とセリフ

言葉の選択やセリフなどに関して工夫した点は全員にセリフを分け与え、答え合わせを丁寧に行うという点である。

最初は、セリフと出てくるシーンが多いのは白ヤギ、黒ヤギの新人ヤギ2人と社長ヤギの計3人で、その3人にはセリフを用意していた。しかし、より作品を面白く、子どもたちとの答え合わせの対話を丁寧に行うことができるように一人一人の役に合わせたセリフを考え取り入れた。

その一つとして、例えばブタ役だと最後の答え合わせの際に、最初のセリフ段階では「1軒目はブタよ！お手紙あったよ！」のセリフだった。これだけでは、見ている子どもたちはこれまでネコやブタに見えていたその動物が突然出てきて、正体はブタでお手紙も合っていたと言われても突然過ぎて何のことだろう？と思っている間に答え合わせが終わり、一人一人の出番がいつのまにか終わってしまう。きっと子どもたちの中には、何に間違えられてたんだろう？と考える子や、話の流れについていけない子がいるのではないかと考えた。

そこで、「ネコの服を着ているからネコと間違えられてしまうけれど、本当はブタよ！お手紙あったよ！」と言うセリフに入れ替えた。セリフの中には、何が原因で何の動物に間違えられるのか、本当の動物はなんだったのかを分かりやすく伝えられるようにした。

その後のセリフでも、最初はヤギたちがお手紙をあったことだけに喜ぶ姿を見せるシチュエーションだったが、「じゃあ、見えていたネコさんはお洋服のネコさんなんだね！」とヤギが言うことで、いま目の前に見えているもの(動物)がそれまでは何に見えていたのかをもう一度伝えることで、それまで話の中で動物を勘違いしていた子どもたちや、答えに気づいた子どもたちも誰も置いていくことなく、全員が話に入っていけるようにセリフを変えて増やしたり、話を動物たちがまだ隠れているときに遡ったりすることを心がけた。また、それぞれの動物に合うような一人称や語尾を変えて、子どもたちも自分たちも楽しみながらなりきることができるようにするのも工夫点の一つだ。



7匹ともそれぞれ違い、1匹目のブタは女の子でしっかり者のイメージから「あたし」の一人称にして、語尾は「～わよ。」と上品にした。2匹目のクマは男の子で大きな身体をイメージし、「おいら」の一人称にして、語尾は「～やで。」と関西弁を使うようにした。3匹目、4匹目、5匹目は女の子のウサギたち。ウサギたちは複数いて小さく跳ねるイメージから「私たち」の一人称複数にして、語尾は「～だよ。」と跳ねるような元気な口調にした。6匹目のライオンは男の子で大きくずっしりとした強いイメージから「おで」の一人称にし、語尾は強さを出すために無しにした。7匹目のワニは大きな口と牙とは裏腹に優しい男の子のイメージがあったので「ボク」の一人称にして、語尾は「～だよ。」と柔らかな口調にした。



それぞれ、一人称を変えることで、セリフの中で語尾に被りが出ても面白さを感じたり、よりその動物に近付けることができたりと、子どもたちとの一体感を生むことができたと考える。



(執筆者：川口紋奈)

### (5) 動きと身体表現

動きと身体表現で工夫した点は、いかにどうやってその動物に似せた動きをするのかという点である。九州大谷幼稚園でプレを行った際に、ずっと同じポーズや動きをしてしまっていたため、衣装だけをその動物に似せて、衣装だけで分かってもらおうとしているのではないかと先生方からの指摘をいただいたことによって、私たちは、自分たちが演じる動物の動きやポーズを勉強して、その動物になりきることが必要であると気付いた。プレの時は動きだけでなくブタなら「ブーブー」、ライオンなら「ガオー」などと鳴き声を出してその動物を表現したが、他の動物は鳴き声が無かったり、講堂で鳴き声を出しても聞こえないのではないかと考え、動きだけで表現することにした。

衣装や鳴き声だけで動物になりきる事はすぐにできるけれど、それぞれの動物に似せた動きを身体で表現するのはとても難しく苦戦することが多くあった。自分ではその動物の動き

が出来ているように感じていても実際には出来ていなかったりすることがあったため、自分の動きを他のメンバーに見てもらったり、自分自身も他のメンバーの動物の動きを見るなどお互いに見せあいながら、自分の担当の動物の動きの練習に取り組んだ。動き



をもう少し大きくしてみたらどうか、ウサギだったら跳んだらいいのではないかと、ワニだったら足を動かす時に同時に手で口をパクパクしている感じを表したらもっと良くなるのではないかと、などとみんなでアドバイスや意見を出し合って動きを見直した。

それぞれの動物の動きとしては、ブタは鼻に指を当て「ブーブー」と鳴くような感じで子どもたちでも分かるような動きをしたり、しっぽをフリフリする動き、洋服のネコを指さして「ブタの洋服に付いているネコをみて、ヤギは勘違いしたんだよ」と表す動きを取り入れた。クマは「ガオー」と手をクマのようになしたり、「この家は真っ暗で留守と勘違いしやすいけれど、クマがいるんだよ」と動きを大きくして、身体を大きく見せるように表現した。ウサギは3人いたため、全員が同じ窓から出てくるのではなく2人が上の窓から出てきて最初に耳だけを見せて、その後、飛び跳ねる動きを取り入れ、もう1人が下の窓から全身を見せて身体全体でウサギを表現した。ライオンは「ガオー」と手をライオンのようにして表現したり顔身体全体が見える状態でしっぽをフリフリする動きを取り入れた。ワニは足と背中にトゲを付け、足をワニのしっぽと表していたので、下の窓から足を上下に動かしてワニのしっぽのような動きをするのと同時に両手を使って口をパクパクさせているかのような動きを取り入れ、背中のトゲは上の窓から出してトゲだけを手で動かして背中にもトゲが付いているんだよと動きで表した。

本番では、鳴き声を出さずに動きだけで動物を表現したけれど、これまで練習してきた動きでそれぞれ自分の担当の動物に精一杯になりきることができ、子どもたちはその動きを見て大きな声で積極的に答えてくれていたため、子どもたちの探求心を育むことができたのではないかと考える。



(執筆者：陶山夜空)



## (6) 音と音楽

音に関してはピアノを使い、物語を進めていった。この物語は、家の中に隠れている動物たちを子どもたちに尋ねて、その動物を新人のヤギに教えるというお話だ。ピアノはその動物が出てくるタイミングに合わせて、ヒントとして、それぞれの動物に合った曲を弾くことにした。

ヤギが家の方を見ている時は何も弾かずに、ヤギたちの会話に集中し、ヤギが子どもたちの方を見て問いかけている時は、動物が窓から顔を出すので、そのタイミングでピアノを弾いた。はじめに、ブタが出てくるシーンでは、『3匹のこぶた』を弾いた。クマが出てくるシーンでは、『もりのくま』、ウサギが出てくるシーンでは、『兎』、ライオンが出てくるシーンでは、ライオンの足音を表現した低い音を弾き、最後のワニが出てくるシーンでは、『わにのかぞく』を弾いた。どのピアノも全部を弾くのではなく、前奏だけだったり、途中のワンプレーズだけを使ったりした。そのピアノは、それぞれ2回ずつ弾いた。

最後の答え合わせをする際、動物を全員家から呼ぶときに、子どもたちにも馴染みのある行進曲を弾いて、楽しい雰囲気表現した。



(執筆者：平田華那)

## (7) プレ幼稚園子ども劇場における子どもの姿と省察

プレでは動物クイズを行った。プラスチックダンボールに隠れ、後ろからライトを当てることで影絵のようにシルエットだけが映し出され、動物になりきってクイズを行った。まず白ヤギが「私白ヤギなんだけどヤギに見える？」と問いかけると「うん！」と頷く子ども達の姿が多くあった。子どもたちは、次の動物が出てくるのを待ち、移動してくるとライトと身体の距離が近く、シルエットが大きく映し出された。動物クイズと言ったが何をしたいのか伝わっておらず微妙な反応があった。シルエットの大きさを調節し、「これ何の動物か分かる？」と問いかけると「ブタ」や「ウシ」と子ども達は各々頭の中にある動物を口に出している様子が見られた。鳴き声を聞いてみると黒ヤギが「メー」と鳴いた。すると「ヤギ！」と答える姿があった。黒ヤギが登場すると膝立ちをして見ている子どもがいた。

次の動物のシルエットが映し出されると「ブタ」や「ペンギン」と言っていた。中には「ニャーニャー」と鳴き声を言っている子どもの姿もあった。鳴き声を聞いてみるとブタが

「ブーブー」と鳴いた。それを聞いて「ブタ！」と指差しながら言っていた。ブタが登場すると興味深そうに見ている子どもの姿があった。

次の動物が出てくると「ネズミ」や「パンダ」と様々な動物を発言する様子があった。ピアノで『もりのくま』が演奏されるとピアノに合わせて歌い出す子どもがいた。周りの子どもも歌い出し、「クマ」と言う子どもが増えていた。クマが登場すると拍手をして喜んでいる子どもの姿があった。

次の動物が映し出されると「ウサギ」と言う子ども達が多くいた。両手をウサギの耳に見立て保育者に「ウサギ！」と教えている子どももいた。ウサギが登場すると「やったー！」と喜んでいる子どもがいた。

次の動物ではしっぽが出てくると「ライオン」と大きな声で教えてくれていた。少しずつ飽きてきて床に寝転がる子どももいたが周りの子どもの声の大きさに興味を示し、クイズに参加していた。鳴き声を聞くとライオンが「ガオー」と鳴いた。ライオンだと確信をした子ども達はさらに大きな声で「ライオン！」と教えてくれた。ライオンが登場すると「ライオンだ！ガオー」とライオンの真似をして楽しんでいる子どもたちがとても印象的だった。

最後の動物が映し出されると「オオカミ」と答える子どもが多かった。ピアノで『小ぎつね』が演奏されるとピアノに合わせて歌い出す子どもがいた。キツネが登場すると「キツネだー！」と拍手をして喜ぶ子どもの姿があった。全ての動物が出て、「わかった人ー？」と黒ヤギが問いかけると「はい！」と手を挙げる子どもの姿があり、楽しんでくれた様子だった。

(執筆者：尾畑妃奈乃)

## (8) 取り組む過程での改善と工夫

本番前のリハーサルを実際にステージで行った際に、沢山の改善点が見つかった。まずは、子どもたちとの掛け合いの場面で、ヤギ役の2人が子どもたちに問いかける際に「何の動物だと思う？」といった質問をしているだけになってしまっていた。しかし、その部分を本番では、子どもたちの反応を見てそれにあった声掛けなどをするように改善した。劇の導入をする際にも、『やぎさんゆうびん』の歌を歌って話の流れがスムーズになるように工夫をした。

ブタのシーンの時に、ネコの絵がでてくるのだがリハーサルを行った時に後ろの席から少し見えなかったため、ネコの絵を大きく作り直し見えやすくするなどした。ウサギの耳がオオカミの歯に見えるようにするために、最初はウサギ役の人たちがつけているサイズでしていたが、観客席から見た際に、小さすぎて歯に見えず、歯に見えるように大きく作り直した。最初はヤギと子どもたちの掛け合いで劇を進めようとしたが、恥ずかしくて言えない子どもや、声が聞こえなくなる可能性がある為、子どもたちの意見を聞きに行く役割をつくった。リハーサルを行った際に、最後の動物で、ワニがキョウリュウの意見が半分半分だったので、本番でもそうなる可能性があると思込み、どちらの意見が出てもお手紙が出せるように、キョウリュウのお手紙もつくり対応した。子どもたちの反応によって



窓から顔を出したり、引っ込めたり、飛んでみたりなどアクションをつけ加えたりもして工夫をした。

照明に関しては、動物たちが移動する際に見えないように、『やぎさんゆうびん』が流れ、ヤギたちが移動している間は照明を消し、曲が終わると照明をつけるなど工夫をした。

最後の答え合わせの場面では、それぞれの役にあった言い方で、今までの物語の流れ、お手紙があったのかをヤギと一緒に確認しあって子どもたちにもきちんと理解してもらえるように配慮をした。

(執筆者：宮原衣菜)

### (9) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

初めに黒ヤギをおっちょこちょいな黒ヤギの設定であることを想定して寝坊してしまい、集合に少し遅れてしまうという流れを設定した。結果的に子どもたちは、クスクスと笑っていたり、大きな声で笑っている姿が見られたため、私たちが想定していたとおりに導入を行うことができたと考える。

その後に雰囲気作りとして「やぎさんゆうびん」の歌をうたった。保育者やステージにいるヤギを見つめながら笑顔で一緒に歌っていたり、ヤギが歩いている時に手を動かしていたりして、その動きを真似して一緒に手を動かしている姿も見られた。

本格的に劇が始まり、基本的な流れとして、出てきた動物をヤギが勘違いや見間違いをしまい、その間違いを子どもたちに教えて貰いながらお手紙を届けていく、という流れで進んでいく。

初めに出てきた動物はブタだったが、ブタはネコの洋服を着ていて、ヤギがネコと間違えてしまう。しかし、子どもたちはすぐにその間違いに気づき「ブタだよ！」とヤギに大きな声で伝えていた。伝えてくれるが多方面から大きな声で言っているのでヤギに伝わらないことを想定しておにいさん役がマイクで子どもの意見を聞きまわる働きかけを行った。

次にクマが出てくると、すぐに大きな声を出してヤギに伝えるのではなく、手を挙げておにいさん役が来るのを待っている子どもの姿も見受けられた。

初めの方は子どもの意見がヤギに伝わるのに少し時間を要していたが、子どもたちは、おにいさん役が来てくれるのを待って、待つ間は手を挙げたり、他の子どもの発表を聞いたりして待つという流れが出来上がっていた。

最後にワニが出てくるがワニはキョウリュウと間違えるかもしれないと考えていたため、キョウリュウの意見が多くてもいいようにキョウリュウ用のお手紙を用意していた。

実際にはキョウリュウと答えてくれる子どももいたが「ワニ」と答えてくれた子どもの方が多かったため、計画通りにお手紙を届けることが出来た。だがお手紙の確認をして劇を終了しようとした所で子どもたちがボソボソと言い始め、子ど



もから「まだお手紙あるよ！」と大きな声でヤギに伝えてくれていた。

子どもが最後のお手紙に気づいて伝えてくれたが流れを考えていなかったため少し焦りがあった。

だが、黒ヤギが「これは次の街の手紙なんだ」と臨機応変に対応し、子どもの発見が無駄にすることなく舞台を終えた。

最後の手紙に気づき伝えてくれるほどに劇に集中して観てくれていたのだと考えた。

(執筆者：松永王治)

## 5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【平田 華那】

今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、自分たちの視点と子どもたちの視点には全く違うものもあるということである。私たちの劇では子どもに尋ねて、家の中に隠れている動物をヤギたちに教えるという内容だった。

その際、ヤギたちは子どもたちの方を見ているため、なんの動物かは分からない。子どもたちに尋ねてみると、私たちが想像していた動物以外の動物の名前も出てきて、私たちが作成していた時点での視点と、劇を通しての子どもたちの視点では、全く違うものもあったのだと分かった。子どもたちの意見を聴き、その意見を劇の中に取り入れながらお話を進めていくことで、子どもたちもその劇に参加しているかのように、距離を近くに感じ一緒に楽しめることができたのではないかと思った。

その際、私は、その動物に関する曲をピアノで弾き、ヒントを出していたが、ピアノを弾く前からなんの動物か答えてくれる子どもたちも多くいた。子どもたちと対話形式で劇を行うことは初めてだったので不安もあったが、無事に終わることができて良かった。

【田中 千咲都】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもの意見に耳を傾ける大切さと、その場に応じて柔軟に対応する力である。子どもが伝えてきてくれた意見に耳を傾け、応じることで、子どもに、ちゃんと意見がとどいてるよ。聞いているよ。ということを感じてもらい、子どもの存在意義を確かめることのできるきっかけになると学ぶことが出来た。

準備の過程では、子どもたちが自分たちの考えている答えを出してもらうように誘導している感じになってしまっていたり、すべてを子どもたちに答えてもらうような質問ばかりになってしまっていた。これでは、子どもと共に作り上げる劇にはならないと気づいた。その為、子どもの意見を尊重しつつ、ストーリーの軸がずれないように意識して行った。

実践の際の子どもの反応は、予想していた反応もあれば予想していなかった反応もあり、様々な発想力があり面白かった。そして、予想していなかった反応が来た時も子どもたちの楽しさや喜びが欠けることのないように冷静に柔軟に対応することが大切だと学んだ。

【平田 蘭】

今回の幼教こども劇場を通じて最大の学びは、本番では子どもたちの反応にその場に合わせた対応をすることである。予想していた反応もあったが、予想していなかった反応も多くあったため、その場その場の対応を行うことが大切だと気づくことが出来た。

準備の過程では、例えば、ワニの角などをキツネの耳と勘違いする、ウサギの耳をワニのキバと勘違いするといった準備をしていた。実践の際の子どもの反応は、ワニのキバを「ワニ」「キョウリュウ」とウサギの耳を「オオカミ」という反応をしていて、大いに納得することがあった。ワニとキョウリュウはリハーサルの際にキョウリュウと言うかもしれないと予想をしていたので、その場に対応できるように新しい手紙の準備を行うことが出来た。子どもたちは間違えるであろうと思っていたが、子どもたちの目には実際のものを感じとれている

のだと気づいた。子どもたちにインタビューする際も本当の動物を発表したくて多くの子どもたちが「はい」と手を挙げて返事をしてきていたのかなと思った。手紙があと1枚あると気づいた子どもの発言を拾ってその場に応えることができた。

#### 【田中 陸翔】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子ども達への関わり方である。九州大谷幼稚園で行ったプレはただ板を持っておくだけの役割だったが本番のこども劇場では、実際に子どもと関わる機会が多くあった。自分たちが子ども達に対して何の動物に見えるのかマイクを持って聞きに行ったが最初はインタビュー係1人に対して子ども1人にしか聞くことが出来ず子どもは残念そうにしている姿が印象的だった。2回目のインタビューの時は子どもが手をあげてアピールしており、インタビュー係は何人かに聞くことが出来、その時の子ども達の答えが子どもによって違っており面白いと感じた。リハーサルの際はそんなに子どもが答えてくれると予想していなかったため本番では少し戸惑ったが先生のアドバイスを元に動くことで多くの子どもにいくことが出来て子どもの楽しそうな様子を見ることが出来た。たまにマイクを持っていかなくても、大きな声で動物の名前を言う子どもがいた。それを見た他の子ども達も大きな声で動物の名前を言っていたことに気づいた。失敗したところもあったが近くで子ども達の反応を見ることが出来たから良かった。

#### 【松永 王治】

今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、観察力である。私は「おにいさん」役として子どもの意見をマイクを通してヤギ役に伝えるという役だったが、考えていた以上に子どもが手を挙げてくれ動物を答えてくれようとしていた。初めの方は同じ場所やその近くの場所から子どもの意見を拾うことが多かったが、近くの子どものみだけでなく遠くにいる子どもも手を挙げてマイクが来るのを待っていたため、様々な場所を回って子どもの意見を伝えて回った。手を大きく挙げていない子どもも小さく口を開け答えているのを観ていたのもその子どもの近くに行ってマイクを渡してみるとヤギに伝えることができて、笑顔になっていたので良かった。時間や動物の回数も限りがあったため、全部の子どもの意見を伝えるということが出来なかったのもその点は悔いが残る形になった。

準備の過程ではどのくらいの大きさだと子どもに見えやすいか、また伝わりやすいか等メンバーと話し合って何度も作り直した。

子どもが見て間違いを伝えてくれることで物語が展開していくお話だったので、子どもにどのようにわかりやすく伝えるかを第一に考えて準備を進めた。

実際に子どもたちもすぐに考えていた動物を連想させて答えてくれたので沢山準備を行ったのが結果に繋がったのだと考える。

最後のお手紙の流れを考えていなかったことが少し悔やまれるが、ヤギ役のメンバーが臨機応変に対応してくれたので無事劇を終了することが出来て良かった。

#### 【川口 紋奈】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、わかりやすく的確に表現する力である。準備の過程では私たちは役になりきるために衣装からまず用意を始めた。

衣装係と建物係に分かれ、私は建物係だったが、衣装係のみんなで衣装を作り準備をしてきていた。衣装も最初は動物の耳が小ぶりで見ると何役なのか分かって、実際に講堂で演技をすると全く見えず、なんの動きか、何役なのか分からない状態になっていた。同様に作っていたウサギの耳をキバに見立てた小道具も窓から覗かせると見えておらず子どもたちに伝わらないことがわかった。そこで、よりわかりやすく伝えられるように衣装係が衣装や小道具を大きく何度も作り直してくれた。そのため、より大きく見やすくなったことで遠くに座る子どもたちでも反応しやすくなっており、道具を使った表現の力をつけることが出来たと思った。

また、最初は演技での動きが分かりづらいところが多くあった。ブレでは髪の毛を触ったり小さい動きになってしまっており影から見える姿がブタに見えていないと感じた。本番では動きを大きくし、ネコの顔を大きく指差してアピールしたり、隠れる時に「見つっちゃおう！」と焦るブタの気持ちを驚くような手振りや表情で表した。そのときに、動きはゆっくり大きくそして堂々とすると遠くにいる子どもたちにも分かりやすく気づいてもらえるのだとやっていたと感じた。実践の際の子どもの反応は、小道具が出て来てすぐに「ワニ！」と子どもたちが言うほどに的確に伝わりやすい見た目になっていたと感じた。

また、クマ役のシーンでも、手の動きをつけることで子どもたちがそれまでリスなのかクマなのかと迷っているところで分かりやすい動きをつけることで確信を持つこともできたように感じた。

そのように身体を使ったり衣装、道具を使ったりしてわかりやすく的確に表現することで、子どもたちとより深く対話を楽しみながら行うことが出来たと考える。

#### 【陶山夜空】

今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、表現力である。それぞれ自分たちが担当している役の動物をどのように表現するのかを沢山試行錯誤して取り組むことができた。準備の過程では、動物によって動きが違って来るため、それぞれにその動物がどんな動きをしているのかを見て自分なりに身体で表現した。私はワニの担当をして、背中や足のトゲを窓から出し、同時に動かしたり交互に動かしたりと工夫をしたけれど、ワニのトゲや動きがキョウリュウに似ていることからワニに見せるためにはどう動いたらいいかととても難しかった。自分だけではどんな動きをしているのかが分からないため、メンバーの人達に自分たちの動きを見てもらい、ここをこうするともっとその動物に見えるのではないか、この動きを加えたらどうかなどアドバイスをお互いにしながら動きを確認した。子どもたちは想像力や発想力が豊かであるため、ワニの場面だったらトゲがキョウリュウと似ているためキョウリュウと答える子どももいるのではないかなど子どもたちの姿を考察しながら準備をした。また、道具作りでは、どのくらいの大きさにしたら子どもたちに見えやすくなるのかや、窓を1つにするとその窓から出てくることをしり子どもたちのワクワク感が少なくなってしまうのではと考え、窓をどこに取り付けて動物はどこから顔を出すのかなど、様々な点で工夫しながら製作を行った。実際の子どもの反応は、予想していなかった答えが出てくることもあったが、それぞれの動物の動きをみて大きな声で動物を答える姿が見られた。やぎが「なんの動物だと思う？」と問いかけると沢山の子供たちが「はーい」と手をあげて答えている姿からとても劇を楽しんで見てくれているように感じた。準備や練習で何度もセリフや動きが変わったりしたため、難しく悩むことも沢山あったけれど、本番ではこれまでの練習の成果を発揮することができ楽しく終えることができた。

#### 【江崎紗知】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもと私たち学生のやりとりの中で、答えを誘導せずに子どもたちが思ったことでその都度対応していくことが大切だと思った。また、そうすることで子どもの探究心や思考力を育むことができるのではないかと考える。また、対話を通して自分と同じ意見だったり、異なる意見を持っていることを知ったりと発見に繋がっていくと思った。準備の過程では、私は大道具を担当し、どのようにしたら家に見えるのかを考え、意見を出し合った。その結果、ダンボールを小さく長方形にカットし、そのダンボールの色や大きさが異なるように組み合わせていき屋根に見えるようにしていった。また、ウサギの役では大きい窓と小さい窓から出て来るようにし、跳ねてみたり窓から顔を覗かせてみたりと身体で表現した。実際の子供たちの反応は、自分たちが予想していた答えもあったり、自分たちの予想とは違った動物の答えが返ってきたりと多くの動物を答えてくれた。子どもたちの想像力はとても豊かであると思った。子どもたちの楽しんでいる姿を見て、やぎからのお届け物の劇をして良かったと思った。また、家を一から作ったり、

どのようにしたら動物に見えるのか考えたり、とても大変であった。子どもたちが積極的に参加してくれて、自分たちもやっていてとても楽しく、達成感を味わうことができた。

【岡島あゆな】

幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもの意見や想像を膨らませるために、私たちが考えている考えを初めから伝えるのではなく、子どもたちの発言の中から会話を膨らませることが大切だと思った。今回の発表は子どもたちが意見を発しながら楽しむことを大切にしたいため、大道具も窓が2つある家だけでそこから出てくる動物の特徴を見て、想像してもらうことにした。発表をしていく中で、私たちの劇になっていることに気づけず子どもたちが楽しむという点が欠けていた。練習の際これがほんとに子どもたちが楽しいのかなど考えると変更する点が沢山あった。私たちが保育者になった際にも自分が思っていることを子どもに押し付けるのではなく、子どもの意見から膨らませることを大切にしようと思えるきっかけとなった。ストーリーを考えて、役を考えて、大道具作りの中で意見がぶつかることもあったが、本番では、子どもたちがたく発言してくれ、私たちも楽しめることができてよかった。

【尾畑妃奈乃】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子ども達の考えを理解し、共感することの大切さである。ヤギから見えている動物と子ども達から見えている動物が違うため、子ども達の意見に耳を傾け、その意見を肯定することで一緒に物語を作り出している様子があった。子ども達が自由に発言し、ヤギがまとめることで多くの子ども達が思っている動物もその他の動物を発言する子どもの意見の両方を尊重して、見ている全員が楽しめる環境を作ることができていた。また、大きな家を作ったことで物語の中に入った感覚を持って、劇を楽しんでもらえるようにした。家が大きいからこそ表現する時の動きの大きさを考えたり、どの席に座っていても見えやすいように耳の大きさを考えたりと試行錯誤することができた。ヤギの問いかけに対して答えてくれたり、劇が進むにつれて大きな声で発言してくれる子ども達の楽しそうにしている姿があり、成功できたのではないかと思う。

【宮原衣菜】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもたちと一緒に楽しんで発想をどんどん膨らませていくことがとても大切だと学んだ。物語を作り上げて行く際に、子どもたちの反応を予想して話を作り上げていたが、リハーサルの段階でワニではなくキョウリュウの意見が多く出たのでキョウリュウのお手紙をつくったり工夫した。本番では、実際に劇を進めていく中で子どもたちの発想力が凄くて驚いた。クマをタヌキと言ったり、色々な動物が出てきて子どもたちには色々な物に見えているのだと感じた。私たちが考えているより子どもたちの回答は自由で質問していてとても楽しかった。子どもたちの前に立って劇をすることは恥ずかしかったが、子どもたちの明るい雰囲気楽しい劇を作り上げることができたと思う。ただ、楽しむだけでなく子どもたちとの掛け合いの場面でも、一方的に伝えるだけでなく子どもたちの意見にそって動物たちがリアクションや、言葉のキャッチボールをすることで、劇の内容も子どもたちが理解し、発達にも繋がると劇をしてみて感じた。

【加藤李茜】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもたち側からどう見えているのか考えて表現するということだとおもいました。子どもたち側からするとステージの上だから動物役のひとたちは小さく見えると思うので、動きがなかったり小さかったりすると何をしているのか分からないし、大きな声で話さないと子どもたちに届くことは無いなと思いました。場内の1番後ろから撮った映像を見てもっと大きく動いた方がいいとか声を張らないと後ろまで聞こえずらいかなど改善点が見つかったので、子どもたちに楽しんでもらえるよう

ヤギ以外の動物は声を発することができないからこそ役の動物になりきって動いてみたり、子どもたちの意見に対して大きく丸を手で作ってみたりして子どもたちとコミュニケーションをとっていました。ヤギにバレないようにヤギが後ろを向いた時だけ隠れることで子どもたちが今、後ろいるよ！とヤギに教えてくれたり動物の名前を叫んで教えてくれていたので楽しんでいることが伝わってきて嬉しかったです。実際にやってみないと分からないこともあると思うけど、練習の段階からこういう反応があるかもなと考えて臨機応変に対応しつつ楽しんでもらえる表現をすることが大切なのだなと感じました。